The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	宋代の「以食喩詩」について : 蘇軾を中心に
Author(s)	趙, 蕊蕊
Citation	中国研究集刊. 2018, 64, p. 126-143
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/72901
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中国研究集刊　珍号（第六十四号）平成三十年六月　一二六―一四三頁

宋代の「以食喩詩」について

――蘇軾を中心に――

趙　蕊蕊

一　問題の所在

中国の詩歌批評において「味」は極めて重要な位置を占めてきた。いわゆる「詩味」説である。「味」の比喩によって詩を批評するという意味では「以味喩詩（味を以て詩を喩う）」と言い換えてもよい。これについては、すでに学界の注目を集め、様々な角度から論じられてきた(注1)。言うまでもないことだが、「食」が無ければ「味」は成り立たず、「味」と「食」とは不即不離の関係にある。だが、従来の研究は、どちらかと言えば「味」の方に重点を置いており、具体的な食物や摂食という日常の生活に即した「食」への関心は必ずしも十分ではないように見受けられる。

「味」に関する批評は古くより「食」への言及を伴ってきた。すでに先秦の政治や道徳に触れた批評において、その種の発言が少なからず見られる(注2)。「味」をもって詩を評する「以味喩詩」の文学批評は六朝期に行われるようになったが、しかしそこでの「味」は総じて抽象的な意味合いで用いられており、「食」の具体性を欠いているように思われる。これに変化が生ずるのは唐代、特に中唐以降である。当時、士人の生活が貴族的なものから庶民的なものへと移行するのに従い、彼らの審美観もまた世俗化しつつあった。このような動きに伴って、新たな「詩味」説が生み出されたのだと考えられる。この新たな「詩味」説においては、六朝期のような

抽象的で漠然とした「味」ではなく、個別的具体的な味わいである「苦」「甘」「鹹」「酸」の比喩が用いられるようになっていたと言ってよいだろう。

こうした「詩味」説が飛躍的な発展を見せ、成熟するのが宋代である。宋代には、飲食を題材とする詩の隆盛と相俟って「至味」「真味」「餘味」などの語を用いた詩歌批評が盛んに行われるようになる。それに伴って、「食」の比喩によって詩を批評する「以食喩詩」も顕在化してゆく。清の袁枚『随園詩話』には「宋詩話云『郭功甫如二十四味大排筵席、非不華侈、而求其適口者少矣』……以食喩詩（宋詩話に云う「郭功甫は二十四味の大排筵席の如し、華侈ならざるに非ざれども、其の口に適う者を求むれば少し」……食を以て詩を喩う）」とあって、郭祥正の詩の「味」をめぐる宋詩話の批評を「以食喩詩（食を以て詩を喩う）」(注3)だとしている。

宋代に盛行する「以食喩詩」の批評方法は「詩味」説と互いに支え合うものであり、六朝より中晩唐に至る「以味喩詩」の成熟を基盤として成立したと考えられる。宋代の文人たちは先行する批評の伝統を踏まえつつ、さまざまな「食」を詩歌批評に引き入れることで、「以食喩詩」を普遍的な詩歌批評として完成させた。なかでも最も独創的で影響力が大きかったのは、北宋の蘇軾とその周辺の文人たちである。彼らは「以食喩詩」を通して、より多様で複雑な趣味・審美観に基づく詩歌批評を実践していったのである。以下、典型的な例を取り上げながら分析してみたい。

二　「以食喩詩」による詩歌批評の諸相

まず初めに、欧陽脩が梅堯臣の詩を「橄欖」の味わいに喩えた批評を取りあげてみよう。橄欖をめぐる議論については先行研究も多い(注4)。それらを踏まえて私見を述べたい。橄欖という嶺南の物産に着目した最初の文人は白居易であるが(注5)、宋代に至ると橄欖について述べた例は数を増し、この南方の奇果の持つ味わいが文人たちに新鮮な刺激を与えていたことがうかがわれる。そして、宋代には橄欖はしばしば詩歌に喩えられるようになる。なかでも欧陽脩「水谷夜行寄子美聖俞」の次の言葉は注目される。

近詩尤古硬　　近詩　尤も古硬
咀嚼苦難噉　　咀嚼すれば苦くして噉(くら)い難し
初如食橄欖　　初め橄欖を食するが如きも
眞味久愈在　　真味　久しくして愈よ在り(注6)

この詩は慶暦四年（一〇四四）七月の作である。同年の

五月、梅堯臣は呉興の塩税官の職を解かれ、七月に都へと向かう途中に妻謝氏と息子を亡くしている(注7)。欧陽脩が撰した梅堯臣の妻の墓誌銘「南陽県君謝氏墓誌銘」に「慶暦四年秋、予友梅聖**俞**来自呉興、出其哭内之詩而悲（慶暦四年の秋、予が友梅聖**俞**　呉興自り来たりて、其の内を哭するの詩を出して悲しむ）」(注8)とある。仕途の艱難や家族の不幸が続き、梅堯臣は人生の苦難の時期にあったと言えよう。彼がその時作った詩について、欧陽脩は「古硬」、苦くて食べにくく、まるで橄欖を食べるかのようだと評したのだ。ここでの「苦」は「詩味」の苦さとともに、人生の境遇の辛さを含んでいると言ってよい。「真味」というのは橄欖の味のみならず、梅堯臣の謝氏に対する厚い真情を含んでいよう。

梅堯臣自身もまた、欧陽脩の「橄欖」評を認めていたらしく、嘉祐元年（一〇五六）に作った「答宣閬司理」（『梅堯臣編年校注』巻二六）には

歐陽最我知　欧陽　最も我を知る
初時且尚窒　初時　且らくは尚お窒(ふさ)ぐ
比以爲橄欖　比して以て橄欖と為し
迴甘始稱述　甘を回らせて始めて称述す

と述べている。橄欖の味の特徴は「回甘」と述べられるような点にあるが、これが詩における「餘味」を的確にとらえたものとなった。そのため、以後も宋人の詩歌批評に好んで用いられてゆく(注9)。こうして橄欖の比喩による詩評は、苦さの後に口に残る餘味や味わいの微妙な変化をもって詩を評することで「詩味」説に新たな局面を切り開いたのである。

橄欖の他、詩や文を「苦李」に喩えた例もある。例えば、晁補之「次韻四弟以道、十二弟叔与『法王唱和』、兼示無斁弟二首」其の二に次のようにある。

文詞如苦李　文詞　苦李の如し
慘腹人莫食　腹を慘(いた)むれば人の食らう莫し(注10)

宋代において晁氏一族は多くの人材を輩出した。特に真宗・仁宗年間には官界に全盛を誇った。しかし、紹聖年間（一〇九四～一〇九八）には党争によって重大な打撃を被る。蘇門に属した晁補之は紹聖二年（一〇九五）に左遷され、崇寧の初めには官職も奪われてしまった。この詩はその時の作で、晁氏が貧窮した状態にあることを述べる。『世説新語』雅量に見える「道傍苦李」の故事を踏まえ、「苦李」を無用かつ失意の人に喩えている。「文詞　苦李の如し」とは、自らの詩文が苦い李のようだと述べるだけでなく、自らの境遇も反映していよう。梅堯臣と同様に、晁補之は詩風のみならず、人生においても「苦」に染められていたのである。

右に挙げた欧陽脩、梅堯臣、晁補之の批評においては「苦」の味わいが重要な役割を果たしていた。「苦」の対極に位置する味が「甘」であるが、宋代には「甘」の味わいについての批評も少なくない。例えば、梅堯臣「晩坐北軒望昭亭山」（『梅堯臣編年校注』巻二〇）には以下の詩句がある。

況復慙詠歌　嘉辭前有謝　咀嚼在人口　甘美如食蔗

況んや復た詠歌を慙ず　嘉辞　前に謝〔謝朓〕有り　咀嚼して人口に在り　甘美なること蔗を食するが如し

昭亭山は敬亭山。すでに六朝の優れた山水詩人謝朓が「遊敬亭山」を作っている以上、今さらこの山を詠うのは恥ずかしい、と述べている。そのうえで、謝氏の詩の味わいを「蔗」を食する甘美さに喩えている。晋の顧愷之の「愷之毎食甘蔗、恒自尾至本。人或怪之、云『漸入佳境』（愷之　甘蔗を食する毎に、恒に尾自り本に至る。人或いは之を怪しむに『漸く佳境に入る』と云う）」(注11)というエピソードはよく知られている。

宋代の文人たちは、詩の批評にしばしばこの典故を用いている。梅堯臣と類似した表現は、王安石「次韻酬宋玘六首」其の四にも見える。

故交重趼恩何厚　新句連篇韻更高　美似狂醒初嚼蔗

故交　趼を重ねて　恩何ぞ厚き　新句　連篇　韻　更に高し　美なること狂醒　初めて蔗を嚼うに似たり

快如衰病得觀濤

快なること衰病　濤を観るを得るが如し(注12)

宋玘は金溪（江西省金溪県）の人であり、王安石と親密であった(注13)。ここで、王安石は友人の詩の美を、「狂醒」すなわち酒に酔うことに喩えているのだが、さらにそれを「蔗」を食することに喩えている。つまり、宋氏の詩を読むことで得られる文学的快楽を、蔗を食して段々と佳境に入るような酒の酔いの甘美さに喩えている。それによって、相手の詩の持つ素晴らしい魅力を称えるのである。

以上に述べた「苦」や「甘」の味以外に、酸味、辛味など他の味で詩歌を形容した例もある。例えば、蘇軾「贈詩僧道通」（『蘇軾詩集合注』巻四五）に

語帶烟霞從古少　氣含蔬筍到公無

語は烟霞を帯びて古従り少なく　気は蔬筍を含みて公に到る無し

自注に「謂無酸餡氣也（酸餡の気無きを謂う）」とある。禅僧の詩ならではの特殊な風格を「菜気」や「蔬筍気」と形容する例は宋代に少なくない(注14)。宋代には「酸餡」饅頭という小麦粉や野菜で作った特殊な酸味のある食品

がある。禅僧は肉食せずに清苦なる食生活を送っていることから、彼らの詩文をこのように評するのであろう。ここで蘇軾は、道通は普通の禅僧と異なり、作った詩は俗世の酸味や陳腐の気がなく、超脱の風格を持つと評している。

そのほか、蘇軾「再和二首」其の一（『蘇軾詩集合注』巻二八）には、辛味で詩を評する言葉が見える。

最後數篇君莫厭　最後の数篇　君厭う莫れ
搗殘椒桂有餘辛　搗残の椒桂　餘辛有り(注15)

「椒桂」は調味料として用いられたものであるが、蘇軾はこれを用いて、詩に餘韻があることを説明している。さらに「葉教授和溽字韻詩、復次韻為戯、記龍井之遊」（『蘇軾詩集合注』巻三二）に

空腸出秀句　空腸　秀句を出だし
吟嚼五味足　吟嚼すれば五味足る

優れた詩には単なる「苦」や「甘」の味わいではなく、「五味」すべてが備わっていると詠っている。詩歌の味わいの豊富さを評したものと言えよう。

「五味」のみならず「二十四味」の比喩を用いた批評もなされた。先に郭祥正の詩をめぐる「二十四味大排筵席」という「宋詩話」の批評を挙げたが、李復「答張尉書」にも類似する表現が見える。

承示新詩、仰服留心不倦。人之爲文與詩、最見精神。若品格已定、辭氣卑凡、不能更有損益、此甚不佳也。猶肆筵犒設、大排二十四味、件件皆有、而無可下筯去處。

新詩を示さるるを承け、仰服し留心して倦まず。人の文と詩為るや、最も精神を見す。若し品格已に定まり、辞気卑凡ならば、更に損益有る能わず、此れ甚だ佳からず。猶ほ筵を肆ねて犒設し、大排二十四味、件件皆有るも、筯を下して去くべき処無きがごとし(注16)。

李復は、詩文に表された「精神」を重視する。その立場から、格調や文辞ばかりにこだわった詩のつまらなさを、宴席や祭祀に饗されるごちそうに様々な食べ物が並んでいるが、結局食べたいものがない様子に喩えて批判している。味わいが豊富すぎると、かえって味覚を損なうように、詩の味わいが多すぎると目が眩むばかりであり、かえって読者の興味や機嫌を損なう――このような逆説を語っている。

以上、宋代における「以食喩詩」の批評方法について考察を加えた。宋代の文人たちは古くからの「詩味」説を踏まえつつも、そこに多種多様な「食」の比喩を取り込むことで、新たな詩歌批評の方法を作り出していっ

た。それによって、従来は十分に捉えられていなかった詩歌の様々な側面が言葉によって的確に表現されるようになったのである。

三　「以食喩詩」の深化――蘇軾を中心として

飲食に深い造詣があった蘇軾は、「老饕」と自称し、「豚肉頌」「東坡菜羹」など様々な料理を作ったり、味わったり、詠ったりしている。『孟子』に「君子遠庖厨（君子は庖厨を遠ざく）」という言葉があるが、蘇軾は主体的に自らを庖厨に近づけたと言ってよいであろう。このような態度を有する彼は、飲食を用いた批評も少なからず行っている。

蘇軾の「以食喩詩」は、従来の枠組みを越えた独創性を有する。特に注目されるのは、食材や調理方法に及ぶ形で批評を展開した点である。かかる「以食喩詩」の典型的な例として、孟郊の詩に対する批評としてよく知られる「読孟郊詩二首」（『蘇軾詩集合注』巻一六）を取り上げて検討してみよう。其の一には

孤芳擢荒穢　孤芳　荒穢に擢んで
苦語餘詩騷　苦語　詩騷に餘る
水清石鑿鑿　水清らかにして石鑿鑿たり
湍激不受篙　湍激　篙を受けず
初如食小魚　初めは小魚を食らうが如く
所得不償勞　得る所　労を償わず
又似煮彭蠡　又た彭蠡を煮るに似たり
竟日持空螯　竟日　空螯を持す
要當鬬僧清　要らず当に僧〔賈島等〕の清きに鬬わしむべく
未足當韓豪　未だ韓〔韓愈〕の豪なるに当たるに足らず

とある。第二句の「苦語」という評語は、「祭柳子玉文」（『蘇軾文集』巻六三）に述べる「郊寒（郊寒島瘦）」評にも通じている。その前、唐の張為『詩人主客図』序に「以孟郊爲清奇僻苦主（孟郊を以て清奇僻苦の主と為す）」(注17)とあり、孟郊の詩風は苦しいと評されてきた。周知のとおり、孟郊は科挙の落第を繰り返し、四十六歳で及第した後も挫折を重ね、子を失うなど失意の人生であった。彼自身も、自らの人生について「苦」「寒」「飢」(注18)などの語を用いて表現しており、貧賤に苦しむ寒門の徒を自認していたことがわかる。欧陽脩が梅堯臣の詩を橄欖の「苦」に喩えたのと同様、ここでの「苦」や「寒」は、孟郊の詩の風格のみならず、その生涯のあり方を喩えたものと言えよう。

ここで蘇軾は、孟郊の詩の受容体験を、小魚を食する体験に喩えて述べている。小魚は肉が少ないため、調理や食事の際に面倒なことが多い。そのことを「得る所労を償わず」と述べている。そのうえで更に「彭蠡（彭越）」を比喩に用いる。「彭越」は小型の蟹、やはり肉が少なく食事の際には苦労する。そのことを「空螯を持す」と述べている。小魚にせよ、彭越にせよ、面倒な割に腹を満たせぬ食物である。蘇軾は、かかる食物を比喩に用いて、孟郊の詩の意境の狭さ、貧しさ、読後の満足感に欠ける憾みがあることを指摘している。小魚と彭越の味については具体的に述べられていないが、それらが「苦」「寒」(注19)なる味わいを持つことを示唆していよう。個人的な苦境を綴ることで下層の知識人の嘆きを主旋律として歌い込んだ孟郊の詩の特徴を的確に捉えた批評と言える。

このように蘇軾が単に食物の味を比喩に用いるだけでなく、食材そのものや性質に注目していることは、「以食喩詩」における新たな角度を開くものと言えよう。続いて其の二を読んでみよう。

我憎孟郊詩　我は孟郊の詩を憎み
復作孟郊語　復た孟郊の語を作す
飢腸自鳴喚　飢腸　自ら鳴喚し
空壁轉飢鼠　空壁　飢鼠を転ず
詩從肺腑出　詩は肺腑より出で
出輒愁肺腑　出ずれば輒ち肺腑を愁えしむ
有如黄河魚　黄河の魚の
出膏以自煮　膏(あぶら)を出して以て自ら煮るが如き有り
尚愛銅斗歌　尚お愛す　銅斗の歌の
鄙俚頗近古　鄙俚　頗る古に近きを

冒頭の二句は、孟郊の詩を「憎み」ながらも、自身もまた孟郊のような句を作ると述べている。このように言うのは、孟郊の詩を全面的に否定しているわけではないからだろう。そのうえで、「愁肺腑」と形容される孟郊のような詩を、「黄河魚」が自分の身体からにじみ出る膏(あぶら)で自分の身体を煮るのに喩えている。「苦」「寒」と評される孟郊の芸術創作の「憎む」べきほどの苛烈さが見事に捉えられている。最後の二句は、蘇軾が孟郊の「銅斗歌」が持つ古拙な風格を好んでいることを述べる。孟郊の「肺腑」を抉るように苛烈な創作姿勢に対して、蘇軾は敬慕の念を抱き、自分もまたそれを受け続ごうとしているのかもしれない。

右の詩に見られる「以食喩詩」の批評において注目されるのは、「魚」という食材を調理する際の方法やプロセスへの言及がなされていることである。これと類似す

る蘇軾の詩歌批評は、陳師道『後山詩話』（津逮秘書本）にも次のように記録されている。

子瞻謂孟浩然之詩韻高而才短、如造内法酒手而無材料爾。

子瞻謂う　孟浩然の詩は韻高けれども才短かし、内法の酒を造る手の如くして材料無し。

「内法酒」は、皇帝が賜る祭祀用の酒。ここで蘇軾は孟浩然を「内法酒手」と呼び、酒造技術は高いけれども酒造に必要な材料に欠けていると言っている。孟浩然の詩が優れていると認めつつも、詩の素材が豊かではないことを酒材の比喩によって批判したものであろう。詩と詩人の繋がり、詩の創作過程にまで踏み込んだ批評と言っていいだろう。

次に挙げる「次韻孔毅父集古人句見贈五首」其の二（『蘇軾詩集合注』巻二二）に見える「以食喩詩」もまた、詩の創作過程に踏み込んだものと言えよう。

紫駝之峰人莫識　紫駝の峰　人　識ること莫し
雑以雞豚眞可惜　雑うるに鶏豚を以てするは真に惜しむべし
今君坐致五侯鯖　今君　坐ながらにして五侯の鯖を致す
盡是猩唇與熊白　尽く是れ猩唇と熊白

「駝峰」「五侯鯖」「猩唇」「熊白」など古くから高級な珍味と見なされてきた食物を用いて、孔平仲（字毅父）の集句詩を論じて言う。下手な集句詩は「紫駝の峰」に「鶏」や「豚」といったありふれた食物を混ぜるようなものだが、孔平仲の集句詩は「猩唇」「熊白」を集めた「五侯鯖」のように素晴らしい、と。集句詩は先人の既制の詩句を結びつけて作られる。ここでは、それを食物の取り合わせに喩えて批評している。集句という作詩のプロセスにまで踏み込んだ批評であり、やはりこれも従前の「以食喩詩」の枠組みを越えるものとなっている。

興味深いのは、蘇軾の「以食喩詩」が、単なる食物の喩えにとどまらず、奥深い哲理を備えていることである。例えば「安州老人食蜜歌」（『蘇軾詩集合注』巻三二）は次のように述べる。

小兒得詩如得蜜　小児　詩を得て蜜を得るが如し
蜜中有藥治百疾　蜜中　薬有りて百疾を治す
正當狂走捉風時　正に狂走し風を捉る時に当たり
一笑看詩百憂失　一笑して詩を看れば百憂を失う
東坡先生取人**廉**　東坡先生　人の廉を取り
幾人相歡幾人嫌　幾人か相歓び幾人か嫌わん
恰似飲茶甘苦雜　恰も茶を飲みて甘苦雑わるに似たり

不如食蜜中邊甜　　如かず蜜を食う中辺の甜きに

蜜を好んで食した仲殊という詩僧の詩を蜜に喩えている。自分の詩はお茶のように甘みや苦みを備えているが、それに対して仲殊の詩は蜜のように「中辺」が甘いと述べている。この「中辺」には、佛典『四十二章経』に見える「中辺」(注20)説が関わっていよう。このような詩句を持つ本詩は、単なる味わいの比喩による批評を越え、禅理や禅意を詩に持ち込んで批評した例と言える(注21)。本詩と「中辺」説との関係について、王水照・朱剛両氏は蘇軾「評韓柳詩」(『蘇軾文集』巻六七)の「外枯而中膏、似澹而実美（外枯れて中膏たり、澹に似て実に美し）」という評語と重なるものと解し、「辺（外）」は詩歌の言語表現を、「中」は詩歌の旨趣を指しており、蜜の「甜」は詩の「至味」（至高の味）を象徴すると指摘している(注22)。蘇軾「書黄子思詩集後」（『蘇軾文集』巻六七）にも「發纖穠於簡古、寄至味於澹泊（纖穠を簡古に発し、至味を澹泊に寄す）」とあって、「枯」や「澹泊」のなかに至味である「甜」、つまり「膏」や「美」が見出されている(注23)。

さらに、蘇軾には食物がもたらす優劣両面に触れながら、詩が読者に及ぼす効果やその社会的効用について批評する例もある。例えば、「鳧繹先生詩集敘」（『蘇軾文集』巻一〇）には次のように言う。

先生之詩文、皆有爲而作、精悍確苦。言必中當世之過、鑿鑿乎如五穀必可以療飢、斷斷乎如藥石必可以伐病。

先生の詩文、皆有為にして作る、精悍にして確苦たり。言えば必ず当世の過に中り、鑿鑿乎として五穀の必ず以て飢を療すべきが如く、断断乎として薬石の必ず病を伐つべきが如し。

空腹を満たす「五穀」（稲、黍、稷、麦、豆）と病に効ある「薬石」の比喩によって鳧繹先生（顔太初）の詩文を批評している。中身がない作品と異なり、顔太初の詩文は鋭く力のこもった言葉で社会の悪弊を言い当てており、五穀や薬石のような実用性の高いものとして人々のために役に立つと言っている。詩の社会的効用を飲食の比喩によって捉えた点で極めて独創的な批評である。

もう一つ、右と同様の興味深い例として、蘇軾の題跋「書魯直詩後二首」其の一（『蘇軾文集』巻六七）に見える次のような批評を挙げておこう。

魯直詩文、如蟾蜍、江瑤柱。格韻高絶、盤飧盡廢。然不可多食、多食則發風動氣。

魯直の詩文は、蟾蜍、江瑤柱の如し。格韻　高絶にして、盤飧　盡く廃せらる。然れども多く食すべ

からず、多く食すれば則ち風動の気を発す。

黄庭堅の詩文は「蝤蛑」（蟹の一種）や「江瑤柱」（貝柱）に喩えられている。「蝤蛑」や「江瑤柱」という珍奇な食材を詩歌の批評に用いた点ですでに十分に独創的であるが、ここでは更に海産物特有の過敏症状にまで目を向けて、次のように言う。美味なる「蝤蛑」や「江瑤柱」を摂り過ぎると「発風動気」は避けられないが、黄庭堅の詩もそれと同じく読み過ぎてはいけない、と。黄庭堅の詩に備わるある種の「あくの強さ」を見事に抉り出した批評であり、蘇軾ならではの「諧謔」趣味が遺憾無く発揮された例と言えよう。

以上に見てきたように、蘇軾は詩を読んだ際の印象・感想のみならず、詩人の創作態度や作詩技法、更には詩の社会的効用や詩が読者の身体に及ぼす影響などの面に渉って、幅広く「以食喩詩」の方法を用いて批評を展開していった。蘇軾によって「以食喩詩」は成熟した詩歌批評の方法へと高められていったのである。

同様のことは、蘇軾の周辺の文人らの「以食喩詩」についても当てはまる。例えば、文同の「謝任遵聖光禄恵詩」には以下のような評語がある。

尋常得君詩　尋常　君詩を得るに
如隼飢見肉　隼（はやぶさ）の飢えて肉を見るが如し（注24）

任孜（字遵聖）の詩を読むと、まるで隼が肉を前にするかのように感じられるという。隼を自分に、肉を任孜の詩に喩えたものである。ここでは、優れた詩を読む者の興奮が、肉を前にした隼という具体的で臨場感あふれる場面に比喩によって的確に描き出されている。詩を読む者の心の動き、すなわち詩の受容のプロセスにまで踏み込んでいる点で、従来の枠組みを越えた「以食喩詩」と言えよう。

次に、蘇軾の弟子たちによる「以食喩詩」について見てみよう。例えば、張耒「題陸羽祠堂兼寄李援、援有詩殊佳二首」其の二に「清詩弔陸子、味若堂下泉（清詩陸子を弔う、味は堂下の泉の若し）」（注25）、晁補之「感寓十首、次韻和黄著作魯直、以『將窮山海迹、勝絶賞心晤』為韻」其の六（『済北晁先生鶏肋集』巻四）に「清詩如玄酒、胡乃淡而永（清詩　玄酒の如し、胡ぞ乃ち淡にして永からん）」などと述べられる。いずれも相手の詩を高く評価して誉め称えたものである。

これらは必ずしも従来の「詩味」説の水準を越えるものではないが、黄庭堅「書陶淵明詩後寄王吉老」に見える次の批評はどうだろうか。

血氣方剛時讀此詩、如嚼枯木。及綿歴世事、如決定無所用智。毎觀此篇、如渇飲水、如欲寐得啜茗、

如飢啖湯餅。今人亦有能同味者乎。但恐嚼不破耳。

血気方に剛なる時、此の詩を読めば枯木を嚼むが如からん。世事を綿歴するに及べば、決定するに智を用いる所無きが如し。此の篇を観る毎に、渇して水を飲むが如く、寐ねんと欲して茗を啜るを得るが如く、飢えて湯餅を啖うが如し。今人も亦た能く味を同じうする者有らんか。但だ嚼みて破らざるを恐るるのみ(注26)。

陶淵明の詩を読むと、喉が渇く時に水を飲み、眠い時に茶を啜り、飢えた時に湯餅を食するかのようだと、三つの日常的な飲食の比喩を用いて説明している。これらの比喩表現は、陶詩の受容体験やその魅力について、それを美味いとか不味いとかといった味わいではなく、生きていく上で必要不可欠な飲食の比喩によって表現している。しかも、ここではかかる飲食の比喩が、陶詩を読む黄庭堅自身の人生体験とそのなかで培われた人生観と密接に結びつけられている(注27)。

蘇軾や黄庭堅の次の世代の文人恵洪は、蘇軾・黄庭堅の詩論を高く評価し、それを受け続ごうとした。彼の『冷斎夜話』には、すでに述べた黄庭堅に対する蘇軾の「蝤蛑」「江瑤柱」の評に類似した次のような記事が見える。

予詩曰「雁蕩天台看得足、……」。瑩中喜而謂曰「此詩如岐下豬肉也、雖美、無多食」。後三年、予客漳水、見瑩中姪勝柔自九江來。出詩示予曰「仁者雖逢思有常、……」。予謂勝柔曰「公癡叔詩如食鰣魚、唯恐遭骨刺耳。與岐下豬肉、不可同日而語」。

予が詩に曰う「雁蕩天台　看得て足れり、……」と。瑩中喜びて謂いて曰く「此の詩は岐下豬肉の如し、美しと雖も、多食する無かれ」と。後三年、予漳水に客たりて、瑩中の姪勝柔　九江自り来たるに見ゆ。詩を出して予に示して曰く「仁者　逢うと雖も　常有るを思う、……」と。予は勝柔に謂いて曰く「公の痴叔の詩は鰣魚を食うが如し、唯だ骨の刺すに遭うを恐るるのみ。岐下の豬肉と、日を同じくして語るべからず」と(注28)。

恵洪と陳瓘（字瑩中）が肉と魚の比喩を用いて互いの詩を批評し合ったという記事である。先ず、恵洪の詩に対する陳瓘の「岐下の豬肉」の比喩を用いた評について見てみよう。蘇軾は曽て「仇池筆記」に「岐下の豬肉」の故事を述べたことがある(注29)。陳瓘は、この故事を踏まえて、恵洪の詩は美味であるが、しかし食べ過ぎてはいけないと諧謔を込めたのである。美味なる食物は、美味であるからこそ多食してはならぬという宋人の飲食に関する養生観が現れたものと言ってもいいだろう。

では、一方の陳瓘の詩に対する恵洪の「鰣魚」の比喩を用いた評についてはどうか。「鰣魚」は、江南に産する美味なる魚として知られ、宋代の文人にしばしば言及されている(注30)。恵洪の評は、美味なる「鰣魚」に骨が多くあるように、陳瓘の詩も「白璧の微瑕」を免れてはいないと述べたのである。陳瓘と恵洪との間で交わされた詩歌批評は、互いに相手の詩を称えつつも、それが瑕瑾を免れていないことを、「食」をめぐる諧謔的な比喩表現を用いて指摘したものである。

以上、蘇軾とその周辺の文人たちが、多種多様な「食」の比喩によって詩の制作・受容をめぐるさまざまな問題を捉え論じていたことを見てきた。彼ら北宋文人によって、従来の「以食喩詩」は格段に深化・発展させられたと言えよう。では、この種の批評方法は、南宋においてはどのように受け続がれていっただろうか、節を改めて検討してみたい。

四　南宋における「以食喩詩」の展開

南宋においても「以食喩詩」の例は数多く見られる。例えば、南宋の周紫芝「書何正平詩巻後」には次のような例がある。

讀參寥子七字絶句如小兒笑蔗、讀正平五字詩如大兒食藕。二物皆可人口、要常使知味者自評之耳。曩時人問可郎詩何如、僕嘗應之曰「可公詩、其苦腴相半、頗似韋應物、至其骨清而氣秀、則又彷彿孟浩然輩」。

参寥子の七字絶句を読まば小児の蔗を笑うが如し、正平の五字詩を読まば大児の藕を食うが如し。二物皆人口に可なり、要は常に味を知る者をして自ら之を評せしむるのみ。曩時　人の可郎の詩何如と問うに、僕嘗て之に応えて曰く「可公の詩、其れ苦腴相半ばし、頗る韋応物に似たり、其の骨清にして気秀なるに至りては、則ち又孟浩然の輩に彷彿たり」と(注31)。

参寥子の七言絶句を読むと、まるで蔗を見て喜び笑う子どものような気持ちになり、祖可（字正平）(注32)の五言詩を読むと、蓮根を食するような趣を感ずると言う。これに続けて、祖可の詩の「苦」と「腴」が融合するところは韋応物に、「骨清」「気秀」なるところは孟浩然に似ていると述べる。周敦頤「愛蓮説」が「出淤泥而不染、濯清漣而不妖、中通外直、不蔓不枝、香遠益清、亭亭淨植（淤泥より出でて染まらず、清漣に濯われて妖ならず、中は通じ外は直く、蔓あらず枝あらず、香遠くして

益清く、亭亭として浄く植ゆ）」と説くように、蓮根には「骨清」「気秀」の特徴がある。周紫芝は祖可の詩を「藕」の「苦」「清」なる味わいに喩えているのである。

次に、南宋を代表する詩人楊万里の例を読んでみよう。「和元挙叔見謝載酒之韻二首」其の二（『楊万里集箋校』巻二）には、次のような詩句がある。

挈榼慚無桑落酒　榼を挈れば桑落酒無きを慚じ
贈詩如得漢陰鰒　贈詩　漢陰の鰒を得るが如し(注33)

「桑落酒」は美酒。美酒はないけれども、美味なる漢陰の鰒魚はあると言っている。楊元挙（字文升）から贈られた詩を美味なる魚の肉に喩えたものである。また、「読淵明詩」（『楊万里集箋校』巻二二）は

腹腴八珍初　腹腴　八珍の初
天巧萬象表　天巧　萬象の表

と述べ、陶淵明の詩を「八珍」に喩えて称賛している。

先に、蘇軾が食物の比喩によって作詩のプロセスを評していたことを見たが、同様の例は南宋期にもしばしば見える。例えば、楊万里の「跋徐恭仲省幹近詩三首」（『楊万里集箋校』巻二六）には

朝蘭夕菊都餐卻　朝蘭　夕菊　都（すべ）て餐卻せり
更斫生柴爛煮詩　更に生柴を斫りて詩を爛煮す

とあって、徐賀（字恭仲）が工夫を凝らして詩を作ることを、料理を作ることに喩えている。もう一つ、曹彦約「次韻隆慶楊使君送別之章」（『全宋詩』巻二七三一）には

細讀君詩字字新　細（つぶ）さに君の詩を読めば　字字新なり
巧將鹽豉入羹蒓　巧みに塩豉を將って羹蒓に入る

とあって、楊使君の詩の新奇さを、塩豉を蒓羹に加えることに喩えている。これは、調理技術の巧みさによって作詩の技巧を褒め称えたものであり、作詩のプロセスに踏み込む形での「以食喩詩」の例と言えよう。

続いて更に周密「奉還山西詩巻」（『全宋詩』巻三五六〇）の次の言葉を見てみよう。

詩腸抱飢饞　詩腸　飢饞を抱き
嗜句如嗜炙　句を嗜むこと炙を嗜むが如し
長年齮雞跖　長年　鶏跖を齮み
有味如啖蔗　味有ること蔗を啖うが如し
……
忽來五侯鯖　忽ち五侯鯖来たり
心目爲驚詫　心目　為に驚詫す
大羹足眞味　大羹　真味足り
禁臠增重價　禁臠　重価を増す
仙露承金莖　仙露　金茎を承し
天漿瀰瓊斝　天漿　瓊斝に瀰たり

何修乃得此　何の修ありてか乃ち此を得る
咀嚼日不暇　咀嚼して日に暇あらず
毎擬賦老饕　老饕を賦するを擬する毎に
欲作口屢嗄　口の屢しば嗄るるを作さんと欲す

ここには「炙」「雞跖」「甘蔗」「五侯鯖」「大羹」「禁臠」「仙露」「天漿」など多種多様な飲食物の比喩が集中的に用いられる。宋代における「以食喩詩」の集大成とも言うべき批評が展開されている。

以上に関連して興味深いのは、南宋において文人たちは、詩以外の、さまざまな対象についても食物の比喩を用いて評していることである。ここでは陸游の例を挙げよう。例えば、淳熙十四年（一一八七）、厳州（浙江省淳安県）での作「冬夜読書」（『剣南詩稿校注』巻一九）には次のようにある。

無聲九韶奏　無声なるが九韶奏し
有味八珍美　味有りて八珍の美なり(注34)

冬夜の読書は、無声であるにもかかわらず、雅なる九韶を聞き、八珍の美味を嘗めるかのようであると述べる。読書の快楽が、聴覚や味覚の快楽に喩えられている。これに類似した例として、慶元六年（一二〇〇）の夏、故郷での作「午枕」（『剣南詩稿校注』巻四三）には以下の詩句がある。

書中至味人不知　書中の至味　人知らず
雋永無窮勝粱肉　雋永にして無窮なるは粱肉に勝る

「粱肉」は精美なる料理。書物の中には至味があり、この味わいは粱肉の美味しさに勝ると述べている。この「読書有味」については、陸游の他の詩にも繰り返し述べられている(注35)。

以上は読書について食物の比喩を用いた例であり、「以食喩詩」と共通する点も多い。ところが、南宋期には、さらに幅広く多様な対象について食物の比喩が用いられるようになる。例えば、閑適や睡眠の味わいまでもが食物に喩えられるようになる。その典型的な例として、やはり陸游の作品を挙げよう。陸游「小舟」（『剣南詩稿校注』巻二五）には次のようにある。

宦途危虎尾　宦途　虎尾より危く
閑味美熊蹯　閑味　熊蹯より美なり

官途は「虎尾」のような危険の境地より怖しく、閑適な味わいは珍味である熊蹯より美味しいと述べている。また、「冬夜」（『剣南詩稿校注』巻二五）には

新醅引睡睡味濃　新醅　睡を引きて睡味　濃く
有如猩脣薦駝峯　猩脣　駝峰を薦むるが如し

「春日」（『剣南詩稿校注』巻二七）には

春濃日永有佳處　春濃くして日永くして佳処有り
睡味著人如蜜甜　睡味　人に著く蜜甜きの如し

とあって、眠りの味わいを猩唇、駝峰、蜂蜜のような美食に喩えている。このような例は陸游の詩集に数多く見られる(注36)。

五　まとめ

宋代の文人の「食」に対する関心の高まりは、中国の「詩味」説に大きな変化をもたらした。その変化を一言で言えば、「食」をめぐる多種多様な比喩によって、個別的・具体的な日常生活に密着した形で詩歌をめぐる諸問題が捉えられるようになった、ということになるであろう。宋代以前の詩歌批評にも「食」の比喩を用いた例が全くないわけではないが、批評方法として定着し、深められていったのはやはり宋代である。

吉川幸次郎『宋詩概説』は、宋代に生じていた詩学上の変化について「外なる事物にそそがれる宋人の目は……至って特別ならざる事物にもむけられた。すなわち日常の生活に対する観察である。従来の詩人が見のがしていた日常生活の細部、あるいは事がらは見のがすべくもなく普遍に日常的であるが、あまりにも身近であるために、詩の素材とはならなかったもの。それらを宋人はさかんに詩にする。そのため宋人の詩は、従来の詩よりも、ずっと生活に密着する」(注37)と述べている。これは食物の比喩についてもほぼそのまま当てはまる。蘇軾をはじめとする宋代文人によって、高雅なものであった詩の批評は、食物の比喩が導入されることで、より卑近な「日常生活」へと密着していったのである。「雅俗」の融合と言い換えることもできるかもしれない。

「以食喩詩」の背後に生じていた現象として、いま述べた「雅俗」の融合のほかに、もう一つ指摘しておきたいのは「諧謔」の愛好である。宋代の文人たちは「諧謔」を好み、親密な友人同士が詩文を批評し議論を戦わせる際に、相手をからかい戯れることが多かった。「以食喩詩」の批評の多くは、そのように親しい文人同士が集う寛いだ座談の場においてなされたと想定できる。そのことは、本稿に挙げた例からも窺い知れよう。

「雅俗」の融合にせよ、「諧謔」の愛好にせよ、より大きな歴史的視点に立って言えば、貴族文化が解体し庶民文化が勃興しつつあったことが反映されていたと言えるのではないだろうか。

注

（1）陳応鸞『詩味論』（巴蜀書社、一九九六年）を参照。

（2）例えば、老子『道徳経』巻下に「治大國若烹小鮮」、『左伝』昭公二十年に「和如羹焉、水火醯醢鹽梅、以烹魚肉、燀之以薪、宰夫和之、齊之以味、濟其不及、以泄其過。君子食之、以平其心」とあり、晏子が「羹」の比喩を用いて君臣の「和」を論じている。

（3）袁枚『随園詩話』巻一二、人民文学出版社、一九六〇年、四一三頁。

（4）張蜀蕙「北宋飲食書写中的南方経験」（『淡江中文学報』、二〇〇六年第一四期）、陳素貞『北宋文人的飲食書写——以詩歌為例的考察』（台北大安出版社、二〇〇七年）、曹逸梅「中唐至宋代詩歌中的南食書写与士人心態」（『文学遺産』、二〇一六年第六期）を参照。

（5）白居易「送客春遊嶺南二十韻」（謝思煒『白居易詩集校注』巻一七、中華書局、二〇〇六年、一三四九頁）に「麵苦桃榔裏、**浆**酸橄欖新」とある。

（6）劉徳清等『欧陽脩詩編年箋注』巻六、中華書局、二〇一二年、第二冊、七〇一頁。

（7）梅堯臣「書哀」（朱東潤『梅堯臣集編年校注』巻一四、上海古籍出版社、一九八〇年、上冊、二四七頁）に「天既喪我妻、又復喪我子。兩眼雖未枯、片心將欲死」とある。なお、以下、取り上げる梅詩は本書に依り、篇名の後に書名と巻数を記す。

（8）欧陽脩『居士集』巻三六（洪本健校箋『欧陽脩詩文集校箋』、中冊、九三九頁）を参照。

（9）例えば、参寥子「次韻陳敏善秀才見過」（『全宋詩』巻九二〇、北京大学出版社、一九九一年）に「故人新自廣陵來、問我詩囊近何有。吾言淡薄非橄欖、縱可咀嚼聊能久」、恵洪「送覚海大師還廬陵省親」（『全宋詩』巻一三四四）に「此詩語散緩、細讀有奇趣。譬如食橄欖、入口便酸苦」、恵洪「題萬富楼」（同上）に「此詩如橄欖、初嚼欲棄投。終然成可口、味永當見收」とある。

（10）『済北晁先生鶏肋集』巻六、『四部叢刊』景明本。

（11）『晋書』巻九二顧愷之伝、中華書局、一九七四年、第八冊、二四〇五頁。

（12）高克勤点校『王荊文公詩箋注』巻三二、上海古籍出版社、二〇一〇年、八一一頁。

（13）題注には「曾景建言『宋玘是金溪人、公少所厚。後篇言「故交重跰」、當是宋自撫來、訪公金陵』」とある。

（14）恵洪『冷斎夜話』巻六「大覚禅師乞還山」（張伯偉**編**校『稀見本宋人詩話四種』、江蘇古籍出版社、二〇〇二年、五五頁）には「大覺璉禪師、學外工詩。舒王少與遊、嘗以其詩示歐公。

歐公曰『此道人作肝臓饅頭也』。舒王不悟其戲、問其意。歐公曰『是中無一點菜氣』」、蔡絛『西清詩話』巻下（『稀見本宋人詩話四種』、二二四頁）に「東坡在徐、戲參寥曰『吾師比復飲酒食肉、何耶』。參寥初不悟、嘖曰『道潛久從公遊、未嘗一日渝齋禁』。坡云『曷固隱、師飲饌精豐仍甚』。問何從知、曰『以近詩知之、如「隔林彷佛聞機杼，知有人家住翠微」。大無蔬筍氣也』」とある。

(15) 原唱は曾肇（字子開）「賦扈蹕」詩である。本稿で取り上げた蘇軾の詩文は、全て馮応榴輯注『蘇軾詩集合注』（上海古籍出版社、二〇〇一年）、孔凡禮点校『蘇軾文集』（中華書局、一九八六年）を底本とし、巻数はこれらに基づく。

(16) 『潏水集』巻四、『文淵閣四庫全書』本。

(17) 計有功『唐詩紀事』巻六五、上海古籍出版社、一九八七年、九七六頁。

(18) 例えば、「苦寒吟」（『孟東野詩集』巻一、宋版影印、大安株式会社、一九六七年）に「調苦竟何言、凍吟成此章」、「感懐八首」其の二（『孟東野詩集』巻二）に「去去勿復道、苦飢形皃傷」、「夜感自遣」（『孟東野詩集』巻三）に「夜學曉未休、苦吟神鬼愁」とある。

(19) 宋・傅肱『蟹譜・薬證』（宋『百川学海』本）に「（蟹）性寒」とある。

(20) 『四十二章経』に「佛所言說、皆應信順、譬如食蜜、中邊皆甜、吾經亦爾」とある。

(21) 周裕鍇『法眼与詩心――宋代佛禅語境下的詩学話語建構』（中国社会科学出版社、二〇一四年、一五五頁）を参照。

(22) 王水照、朱剛『蘇軾評伝』第五章「文芸成就与美学思想」（南京大学出版社、二〇一一年）を参照。

(23) 「食蜜中邊甜」の批評は、以後の文人たちに大きな影響を与えた。例えば、宋・謝薖「読呂居仁詩」（『謝幼槃文集』巻一、『続古逸叢書』景宋刊本）に「淺詩如蜜甜、中邊本無二」、李彭「謝霊運詩云『中為天地物、今成鄙夫有』、取以為韻、遣興作十章、兼寄雲叟」（『日涉園集』巻二、『民国豫章叢書』本）に「學詩如食蜜、甘芳無中邊」とある。その他、劉才邵や陳与義、許及之、曹彦約、王義山、董嗣杲、陳紀などの詩を蜜に喩えた例もある。「食蜜」という批評表現は宋代を一貫していると言えよう。

(24) 『丹淵集』巻四、『四部叢刊』景明汲古閣刊本。

(25) 李逸安等点校『張耒集』巻六、中華書局、一九九九年、七六頁。

(26) 『宋黄文節公全集』外集巻二三（劉琳、李勇先等校点『黄庭堅全集』、四川大学出版社、二〇〇一年、第三冊、一四〇四頁）を参照。

(27) ちなみに黄庭堅は、経典の読解においても食物の比喩を用いている。例えば、「跋雙林『心王銘』」に「若解雙林此篇、

則以讀『論語』、如啖炙自知味矣。不識心而云解『論語』章句、吾不信也」と述べる。『心王銘』は傅翕すなわち傅大士（四九七～五六九）によって作られた銘（『景徳伝燈録』巻三〇）。黄庭堅は『心王銘』の「了了識心」「識心是佛」という観点から『論語』の句を解するのだが、その際に「炙を啖う」という比喩が用いられている。

(28) 『冷斎夜話』巻一〇（『稀見本宋人詩話四種』）を参照。

(29) 蘇軾『仇池筆記』（華東師範大学出版社、一九八三年、二三三頁）に「予昔在岐下、聞河陽豬肉至美、使人往致之。使者醉、豬夜逸、貿他豬以償、吾不知也。客皆大詫、以爲非他產所及。已而事敗、客皆大慚」とある。

(30) 例えば、趙抃「和美毘陵鱘鮧之美」（『全宋詩』巻三四二）に「江南鱘鮧客誇肥、公到常州鱠熟時」、王安石「後元豊行」（『王荆文公詩箋注』巻一）に「鱘魚出網蔽洲渚、荻筍肥甘勝牛乳」などとある。

(31) 『太倉稊米集』巻六六、『文淵閣四庫全書』補配『文津閣四庫全書』本。

(32) 祖可については、張福清「釈祖可、何正平其人及詩辨正」（『韓山師範学院学報』、二〇一一年第一期）、李小栄「盧山詩社与江西詩派関係略説」（『文学遺産』、二〇一三年第四期）を参照。詩僧であった祖可は、俗名が蘇序、字正平、蘇庠の弟であり、「可公」や「病可」、「可正平」などとも呼ばれる。題目の「何正平」は「可正平」の誤り。祖可は大観年間（一一〇七～一一一〇）に盧山詩社を組織する。呂本中の『江西宗派圖』に名を列せられ、黄庭堅の詩を高く評価し、それに学んだ。

(33) 辛更儒箋校『楊万里集箋校』巻二、中華書局、二〇〇七年、第一冊、一二八頁。

(34) 錢仲聯校注『剣南詩稿校注』巻一九、上海古籍出版社、一九八五年、第五冊、一六八〇頁。

(35) 陸游「不寐」（『剣南詩稿校注』巻四八）に「讀書有味身忘老、報國無期涕每傾」、「読書」（『剣南詩稿校注』巻五〇）に「我讀殘編食忘味、朱弦三嘆有遺音」とある。

(36) 「紙閣午睡」其の一（『剣南詩稿校注』巻三一）に「放翁不管人間事、睡味無窮似蜜甜」、「雨中熟睡至夕」其の二（『剣南詩稿校注』巻三三）に「蠻氈紙帳方施行、五鼎八珍無此味」、「思帰示児輩」（『剣南詩稿校注』巻五三）に「睡味甜如蜜、人情冷似漿」、舟中作（『剣南詩稿校注』巻六〇）に「閒知睡味甜如蜜、老覺羈懷淡似秋」、「書嬾」（『剣南詩稿校注』巻八〇）に「閒身嶺上雲、睡味蜂房蜜」などとある。

(37) 吉川幸次郎『宋詩概説』、岩波書店、二〇〇六年、二九～三〇頁。